

二軒在家東光寺遺跡

1997

松井田町埋蔵文化財調査会

序 文

二軒在家東光寺遺跡は、松井田町の住宅事情改善のための施策として計画された宅地分譲事業に先立つ発掘調査により発見されたものです。ここでは縄文時代中期の住居基や土坑、または歴史時代とされる奈良～平安時代以降に属する掘立柱建物跡や溝跡、集石部などが検出されました。

現在、発掘調査の9割以上は開発事業に伴うものであり、松井田町においても全てがこのケースでありますが、それ故に生じる文化財保護と開発の推進の問題は古くて新しい課題と言えます。しかしながら、過去の歴史を踏まえて未来を創造してゆくことは、今を生きる我々にとっての指針となり、「文化」と呼ばれる我々の営みの同一線上にあると考えます。今回の調査で得られた資料が地域史解明の一資料として、様々な教育の場を通じて活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり快く協力いただいた群馬西部土地開発公社ならびに地元の方々、また寒風吹く中で調査に従事していただいた参加者の皆様に、厚く感謝の意を表したいと存じます。

平成9年3月

松井田町埋蔵文化財調査会
会長 武田 弘

例 言

1. 本書は、群馬西部土地開発公社松井田事務所による宅地造成に伴う二軒在家東光寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、群馬県榎水郡松井田町大字二軒在家字東光寺686-1他に所在し、調査面積は3,750㎡、調査期間は1996年1月16日～1996年2月12日までを使用した。
3. 調査は、松井田町埋蔵文化財調査会から委託を受けて山武考古学研究所が実施し、同所調査研究員の小村正之が担当した。
4. 本書の執筆・編集は山武考古学研究所が行い、小村が担当、石田利子・小川悦子・樺沢美枝の協力を得た。
5. 調査に際し以下の諸氏・諸機関にご協力いただいた。(敬称略)

東日本重機・開成測量・新成田総合社

6. 調査参加者は以下の通りである。(敬称略)
- 岩井ひで・打越 進・金谷清一郎・金子潤子・後藤昇二・後藤ふじ子・桜井きん・桜井慎三・桜井敬・杉木はま子・上屋きみえ・中山寅雄・中澤清隆・増田とよみ・山越梅子・吉本律子・萩原南海子・岩井さよ子・大山浩子・桜井れい・高橋千代子・勅使河原西造

凡 例

1. 第1図は松井田町発行2,500分の1〔No.27〕、第2図は日本国土地院発行2万5千分の1地形図「松井田」、第3図は松井田町発行5千分の1〔No.15〕、抄録図は日本国土地院発行5万分の1地形図「富岡」、写真図版1は日本国土地院発行2万5千分の1空中写真を使用した。
2. 図中の方位は座標北、Lは標高を示す。
3. 遺構番号のうち、3号住居跡・4号住居跡は遺物の注記はあるが遺構として認められないため、本報告書では遺構外扱いとした。また6・7号住居跡は、5号住居跡と同一のため欠番となった。

目 次

序文

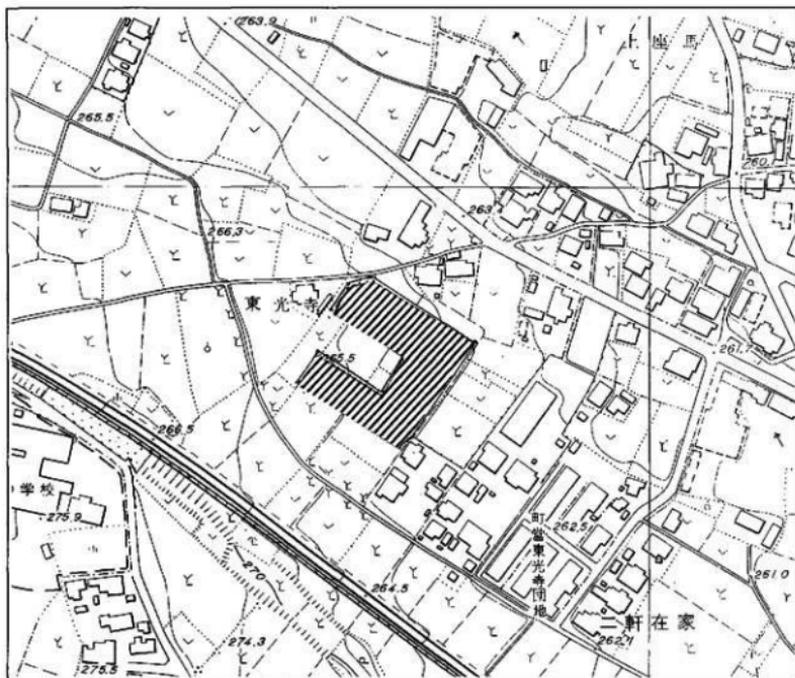
例言

凡例

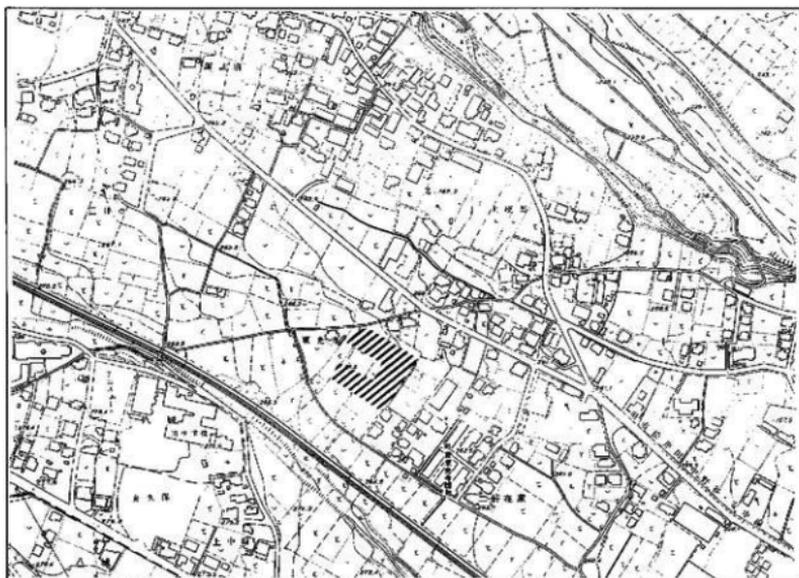
第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 環 境	3
第3章 調査方法・経過	3
第4章 遺構・遺物	5
第5章 まとめ	20
抄録	
写真図版	

第1章 発掘調査に至る経緯

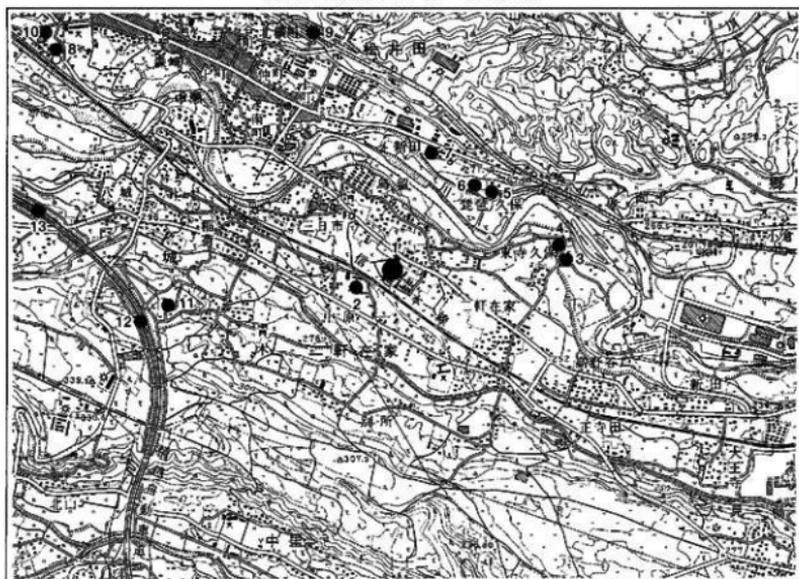
松井田町では若年層を中心とした人口流出が続いているが、主な要因として住宅の不足が挙げられてきた。また町内への新企業進出にともなう従業者の住宅地の不足も表面化してきている。これらの住宅地需要に応え、高齢化と人口流出に歯止めをかけるべく、町の総合計画、整備計画に基づき、群馬西部土地開発公社の事業として住宅地分譲計画が作成された。当該地の埋蔵文化財の状況について、公社担当である町企画課と教育委員会との間で最初の協議が平成7年4月に行われた。以後、同月16日の分布調査及び9月の試掘調査の結果、区域内において縄文と平安期の遺構・遺物が確認され、周知の遺跡となった。ここにおいて埋蔵文化財保護のための協議が行われ、開発計画の変更は不可とされたため、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなった。試掘調査の結果から開発面積の4割弱が遺跡範囲と考えられ、3,750㎡を調査対象面積とした。調査は町教育委員会に事務局を置く松井田町埋蔵文化財調査会が実施することとし、平成8年1月8日付で群馬西部土地開発公社と松井田町埋蔵文化財調査会の間に発掘調査委託契約が締結された。なお、実際の調査は公社の承諾を得、調査会が民間の埋蔵文化財調査機関である山武考古学研究所に業務を再委託して実施した。また、整理作業は同年8月20日付で契約を締結、同機関にて作業が進められた。



第1図 調査区設定図 (S=1/2,500)



第2図 遺跡位置図 (S=1/5,000)



第3図 二軒在家東光寺遺跡と周辺遺跡位置図 (国土地理院2万5千分の1【松井田】)

第2章 環境

第1節 地理的環境

松井田町は、群馬県の南西部に位置する。南は下仁田町、妙義町、東は安中市、北は倉瀬村、西は碓氷峠・妙義山をはさみ長野県軽井沢町に接している。町の地勢は山がちで、碓氷川が町の南寄りのところを西から東へ流れている。碓氷川水系や高田川水系などによって開析された谷筋や河岸段丘上に集落が点在している。本遺跡も碓氷川の下位河岸段丘上にあり、上信越道松井田妙義インターチェンジから東に約3.3km、J R信越線松井田駅から南東へ約2.7kmのところである。現地表面で、標高264～265mである。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺は、碓氷川・高田碓氷川や各々の支流の谷筋に沿って縄文時代以降の遺跡が多く存在する。特に河岸段丘上の平地面には、密度の濃い分布を示している。

上信越自動車道の建設にともない、富岡市の田篠中原・中高瀬観音山、下仁田町の柚瀬・下鎌田、妙義町の古立東山・古立中村・八木連窪沢・八木連窪畑などの遺跡が発掘調査された。松井田町においても行田大道北・行田梅木平・新堀東原ヶ原・五料平・五料野ヶ久保・五料稲荷谷戸・横川大林・西野牧小山平などの大規模な遺跡が発掘調査されている。また他にも松井田工業団地・土塩下原・下増田天神原・八城赤羽板・入見北原・国衛・五料山岸・入山峠・二軒在家二本杉などの遺跡や遺跡群が調査されている。いずれの遺跡も各時代のそれぞれの人々の営みの跡を窺うことができる。

周辺の遺跡一覧

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 二軒在家東光寺遺跡 | 8. 松井田6号墳 |
| 2. 西横野5号墳 | 9. 愛宕山遺跡 |
| 3. 西横野21号墳 | 10. 新堀社宮司遺跡 |
| 4. 西横野20号墳 | 11. 二軒在家二本杉遺跡 |
| 5. 松井田2号墳 | 12. 八城二本杉東遺跡 |
| 6. 松井田3号墳 | 13. 行田大道北遺跡 |
| 7. 松井田5号墳 | |

第3章 調査方法・経過

第1節 調査方法

表土は、確認面までパワーショベルを用いて除去した。遺構検出はジョレンを用いた。遺構の掘り下げは、その堆積状況を観察するため、吊状のベルトを残すかもしくは半載しながら、園芸用の移植ごてを用いて行った。記録は写真と実測図面によった。

写真は35mmのモノクロとカラーリバーサルおよび6×7モノクロを用いた。実測は遺構単体の図面については1/20の縮尺を基準として、上層断面図(セクション)・遺物分布図・完損平面図・完損断面図(エネバージョン)を作成した。また、カマドなどについては別に1/10の微縮図を、全体図は1/200の縮尺で作成した。その等高線は20cm毎に入れた。

測量用の基準杭は、四家座標第Ⅱ系を用いた。X=33860をX0として、南から北へ10m毎にX1・X2・X3……と仮称した。またY=-91580をY0として、東から西へ10m毎にY1・Y2・Y3……と仮称した。

第4章 遺構・遺物

検出された遺構は竪穴式住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、土坑1基、溝状遺構3条・集石遺構1基であった。出土遺物は大型整理箱で6箱である。

第1節 縄文時代

本遺跡で主体を占める時代である。出土遺物から、時間差はそれほど見られず、概めて限定された時期にわずかな生活の痕跡を残していたようである。

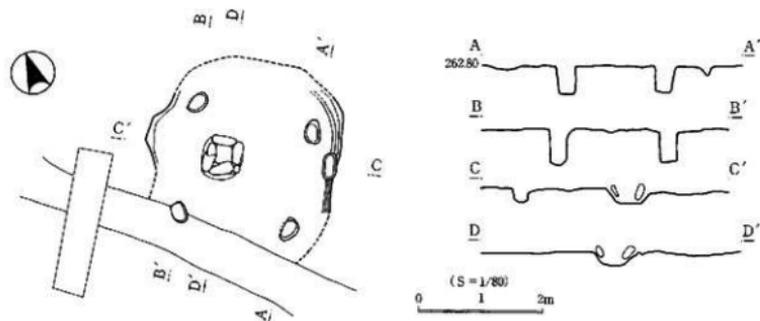
竪穴式住居跡3軒が検出されている。確認面はローム層上面である。いずれも掘り込み面がはっきり確認されなかった。また土坑では1基のみ遺物が出上している。遺構に伴わない遺物は全体の7割を占め、遺構に伴う遺物は、そのほとんどが5号住居跡からのものである。

1. 1号住居跡

検出位置：X5・Y3グリッド内、標高262.60m／平面プラン：直径3m以上のほぼ円形？／覆土：暗褐色～黒褐色土／床面：炉周辺に若干硬い面が残っていた。／炉跡：中央西よりに70cmの掘り方、その中に川原石4石を用いて60cm四方の炉を設ける。中の燃焼部は30cm四方、深さ30cmである。／柱穴：4基検出。いずれも40cm×30cmの不整形に近い楕円形。床面からの深さ50cm。／ピット：東側壁よりに40cm×30cmの楕円形のピット1基検出。／周溝：東側壁よりに長さ1.8m、幅15cm、深さ15cm／遺存状況：壁の立ち上りは東側にかろうじて残っていた。南側は1号溝によって切られていた。

出土遺物：明らかにともなう遺物は出土しなかった。

所見：試掘段階でその存在がわかっていた住居跡である。遺存状況が悪く、出土遺物がないため、営まれた時期ははっきりしないが、付近の遺構外出土遺物（外-1～4）がいずれも加曾利F3式もしくは曾利Ⅲ式であるところから、この時期の所産である可能性が高いといえる。また炉の形態もこの地方の縄文時代中期のものであることを示している。



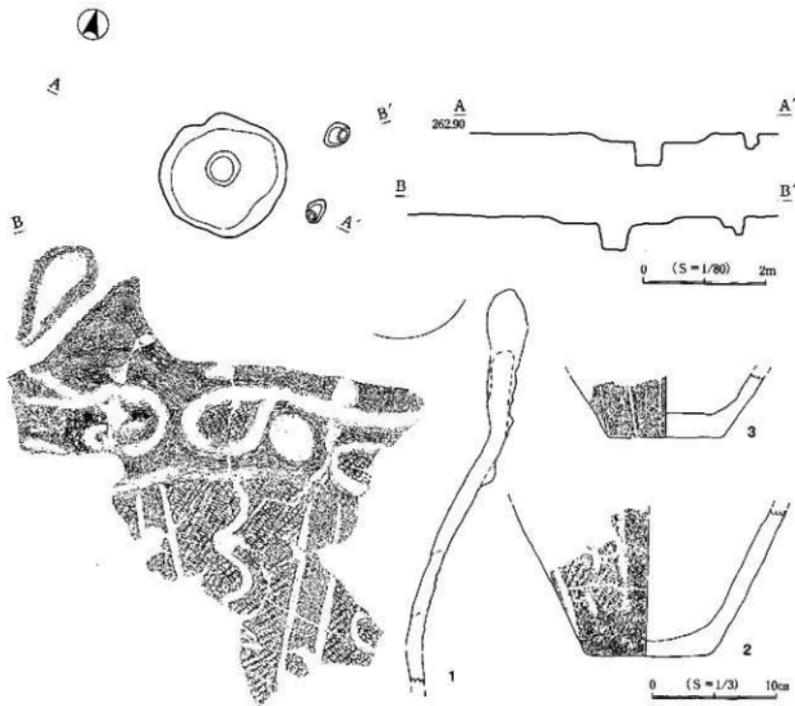
第6図 1号住居跡遺構図

2. 2号住居跡

検出位置：X4-Y2～X5-Y2グリッドにまたがる。標高262.60m／平面プラン：不明、直径2.2m、深さ10cmの円形の掘り込みと柱穴と思われるピット2基によりなる。／床面：不明瞭／覆土：暗褐色／炉跡：円形の掘り込みのほぼ中央に、直径60cm、深さ40cmの掘り方を有す。内部からは1の土器と焼土粒子および炭化粒子が検出された。おそらく埋燬炉であると考えられる。／柱穴：2基？検出、いずれも40cm×30cmの不整形に近い楕円形、床面からの深さ8cm、その中に20cm×10cm、深さ10cmのピットがある。／周溝：検出されなかった。／遺存状況：壁の立ち上りは全く検出されなかった。

出土遺物：加曾利E3式中葉段階と思われる土器が出土している。1は胴部に磨消縄文帯があるが、それは上の方で逆J字形につながらず、また他に胴部縄文帯中に蛇行する沈線を垂下させる。頸部無文帯は見当たらず、口縁部は渦巻状文と栴円区画が存在、その中には縄文が充填される。

所見：遺構の形態が不明瞭であるが、埋燬炉を伴っており、中期以降の住居形態を示すものと思われる。含まれた時期は、出土遺物から加曾利E3式期と考えられる。



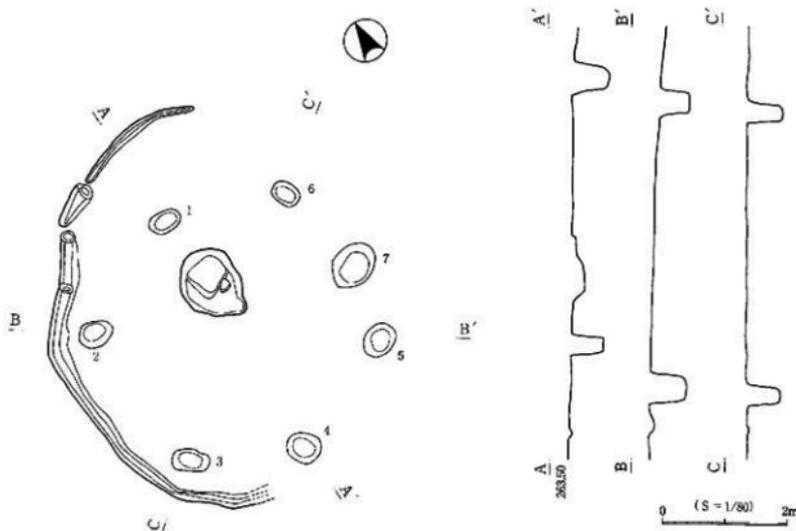
第7図 2号住居跡遺構・遺物図

3. 5号住居跡

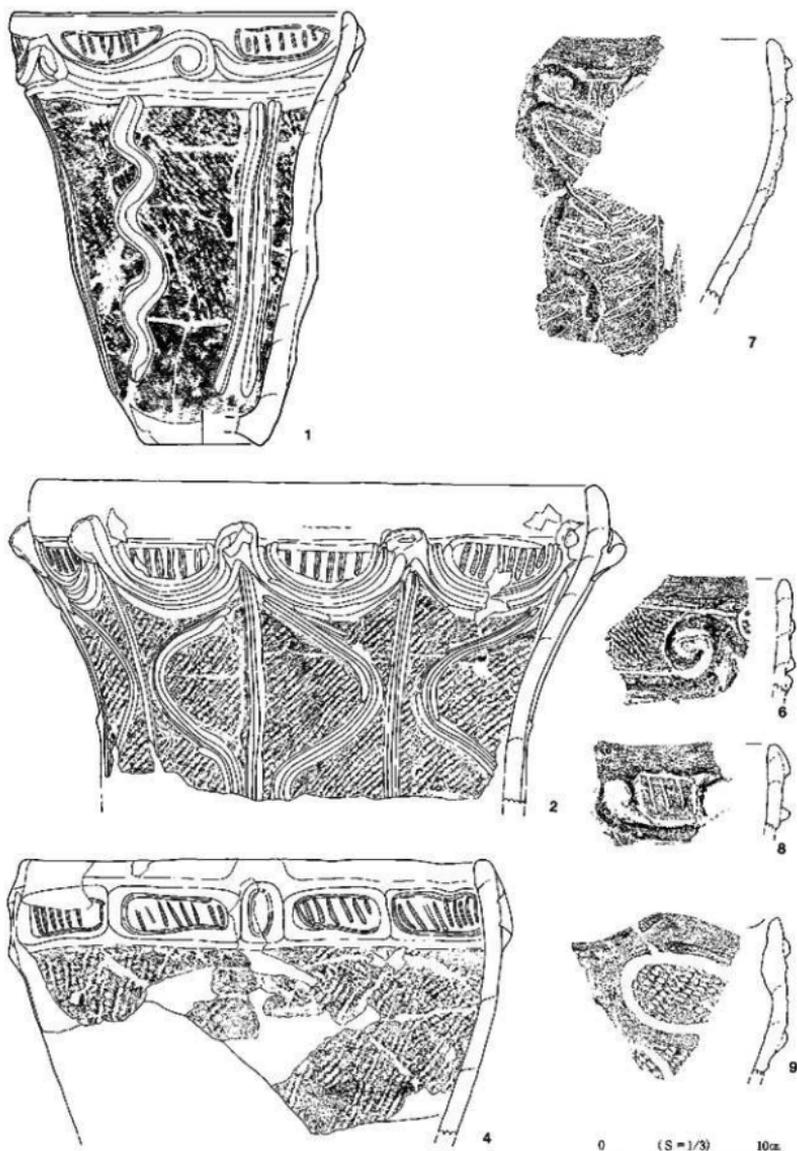
検出位置：X3-Y6～X3-Y7～X4-Y7～X4-Y6グリッドにまたがる。標高263.30m／平面プラン：直径6m以上のほぼ円形／覆土：暗褐色～黒褐色土／床面：ソフトローム面が硬くしまっていた。／炉跡：ほぼ中央に110cm×100cm、深さ10cm、不整形の掘り方、その中の北側に50cm四方、深さ10cmの炉本体を持つ。中に炭化粒子混じりの暗褐色土が充填される。／柱穴：6基検出、北側の柱穴は炉に寄る。50cm～80cm×34cm～60cmの不整形に近い楕円形、床面からの深さ60cm。／ピット：西側周溝内に小ピット3基検出。／周溝：西側寄り平面プランの半分弱を巡る。幅20cm、深さ10cm／遺存状況：壁の立ち上りは検出されず、周溝の半分弱と柱穴・炉が残っているのみであった。

出土遺物：大型整理箱で2箱出土。土器は、いずれも曾利Ⅲ式を客体的要素とした加曾利E3式である。その特徴は1・2・4のように、口縁部の楕円もしくは舟形区画内に縄文でなく沈線を充填すること、頸部無文帯が喪失し、胴部に沈線もしくは隆線を垂下させているが、磨消縄文が施されず、胴部には他に蛇行する沈線もしくは隆線が垂下している点にある。また5のような典型的な曾利Ⅲ式、10のように沈線を多用した曾利式の影響の強い土器が出土している。

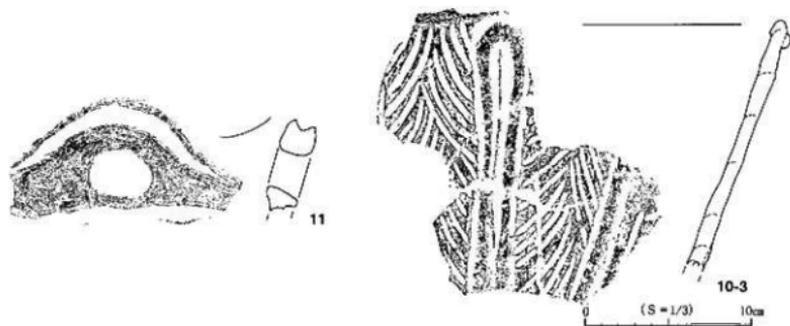
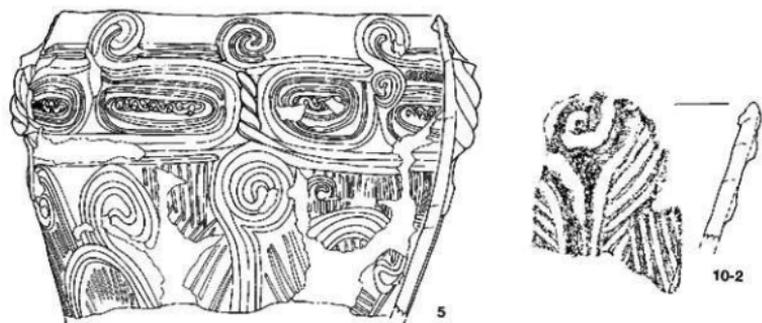
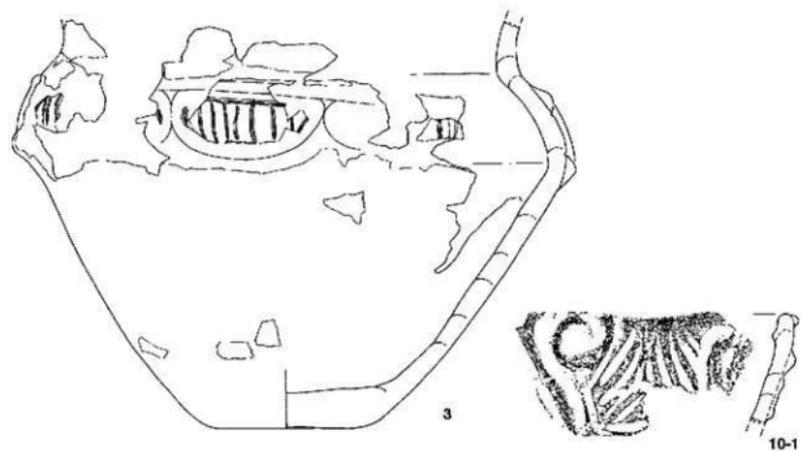
所見：検出時、確認面上に扁平な石が散乱しており、数石住居とも考えられたが、その石よりも30～50cm下から土器等の遺物が出し、さらにその下から炉・柱穴・周溝が検出されたため、中期の円形住居と確認できた。含まれた時期は加曾利E3式期で、中部高地系である曾利Ⅲ式との並行関係および融合が見られる。2号住居跡に比べて、明らかに曾利式の影響を見てとれる資料である。



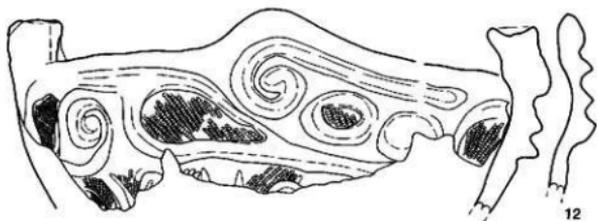
第8図 5号住居跡遺構図



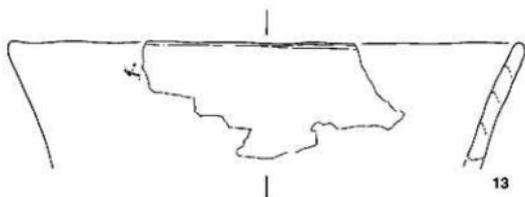
第9图 5号住居跡出土遺物图(1)



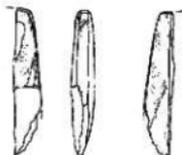
第10圖 5号住居跡出土遺物圖(2)



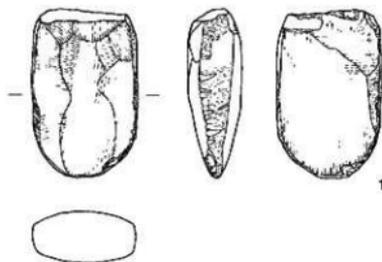
12



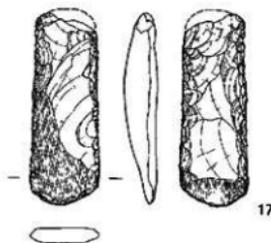
13



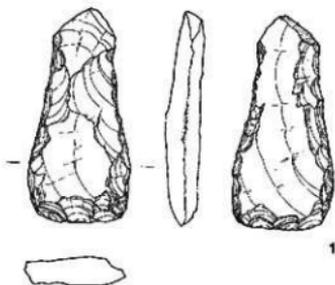
15



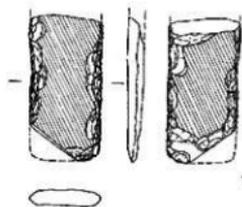
14



17



16



18

0 (S = 1/3) 10cm

第11图 5号住居跡出土物图(3)

4. 1号土坑

検出位置：X 2-Y 4 グリッド、2号掘立柱建物跡中に検出、標高262.5m / 平面プラン：1.56m × 1.0m の楕円形 / 覆土：黒褐色 / 底面：ほぼ平坦

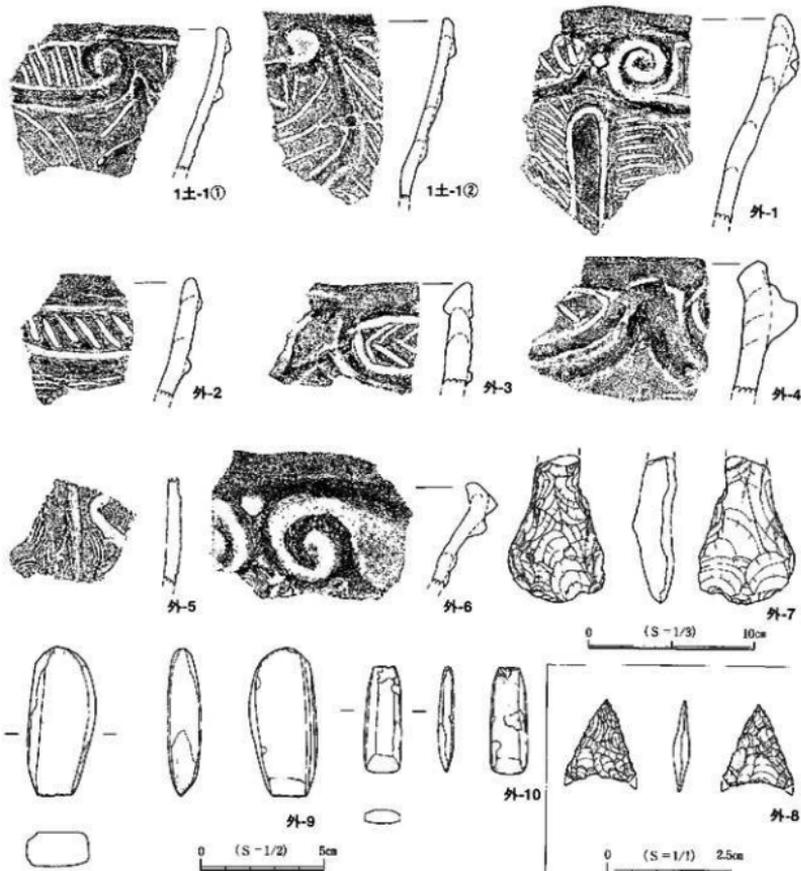
出土遺物：曾利Ⅲ式期に相当する土器が出土している。

所見：本遺跡で検出された土坑の中で唯一縄文時代の所産である。

5. 遺構外出土遺物

縄文時代の遺構外出土遺物は、そのほとんどが調査区内東側に集中している。同時期の遺構も同じように東側に集中している。

外-1～4は、1号住居跡南側のX 4-Y 3～X 5-Y 3 グリッドで出土している。いわゆる曾利Ⅲ式期



第12図 縄文時代土坑・遺構外出土遺物図

に相当する。5号住居跡出土の7・8・10・11に相似しており、沈線を用いた幾何文を特徴としている。

外-5～6は1号住居跡の北側、X5-Y3グリッドで出土しており、加曾利E3式期に相当する。このうち外-6は試掘調査の際にトレンチ内より出土しており、同じトレンチ内に1号住居跡の石囲架が検出されている。外-7～10の石器も1号住居跡の周辺で出土した。この他にも今回図示できなかった遺物の大部分は、1号住居跡の周辺からの出土である。これらの遺物は1号住居跡に伴う可能性もあるが、発掘調査の段階では確認できなかった。

このように遺構外出土遺物を見ると、そのほとんどが住居跡と同じ加曾利E3-曾利Ⅲ式期である。このことから、極めて限定された時期に、小規模の集落もしくは単独の住居が営まれていた可能性が考えられる。

第2節 平安時代

この時期に相当する遺構は、掘立柱建物跡3棟、築石遺構1基、土坑1基および溝1条である。その分布状況は、1号掘立柱建物跡を除いて調査区の東側に集中する。遺構はいずれも浅間B軽石の下に掘り込まれているか、覆土中にB軽石が堆積していた。出土遺物は遺構に伴うものおよび遺構外のものに少なく、特に遺構外出土のものは細片しかないので、本報告書に図示できないような状況である。したがって本遺跡における当該期の様相は、縄文時代 비해痕跡が希薄であるため、集落等のように大きく展開する可能性は低い。

1. 1号掘立柱建物跡

検出位置：X7～8-Y5～7グリッド、標高263.20m／覆土：暗褐色土もしくは黒褐色土、一部B軽石の薄い堆積が見られた。

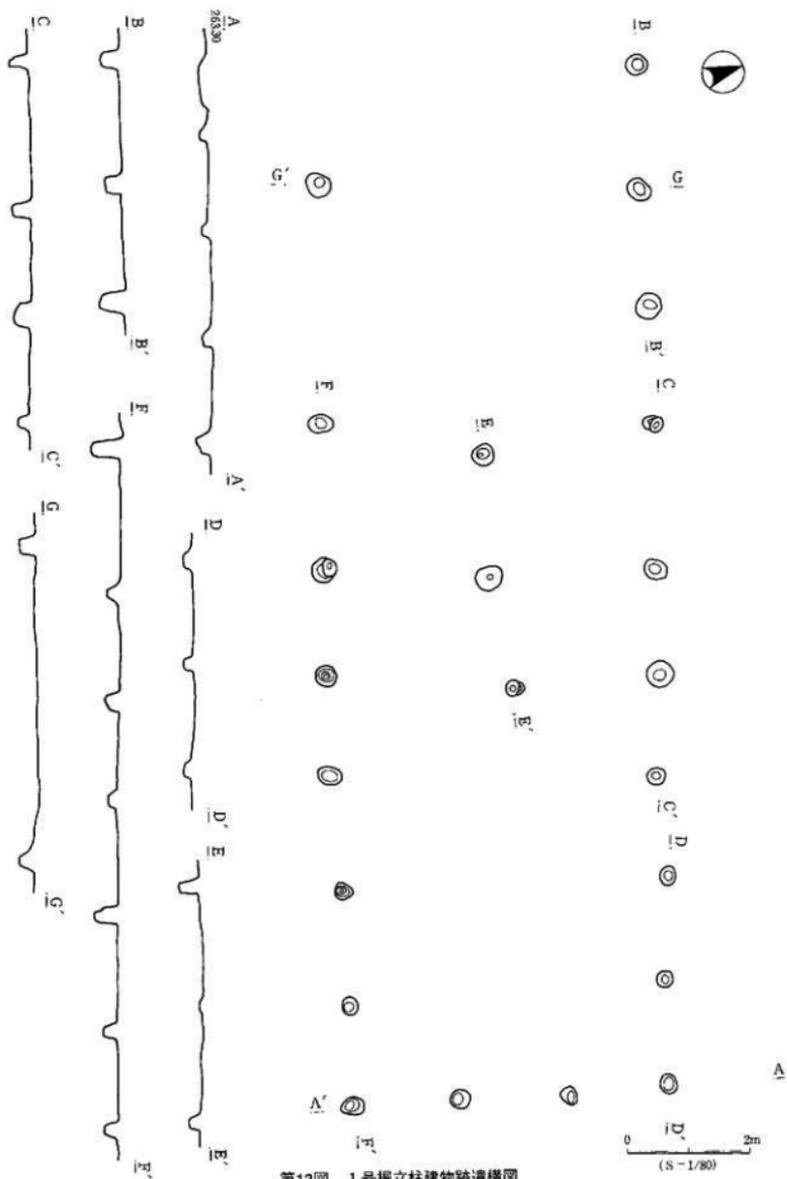
所見：試掘調査で掘立柱建物跡として検出されている。柱間距離が1～1.2mとばらつきがあることと、桁・梁の両方向とも柱穴が対応していない所があるため、2棟以上の重複も考えられる。また、掘り方が貧弱なため、掘立柱建物跡でない可能性も指摘される。時代においても中世ではないかとも考えられたが、覆土とわずかな遺物から一応平安時代とした。

2. 2号掘立柱建物跡

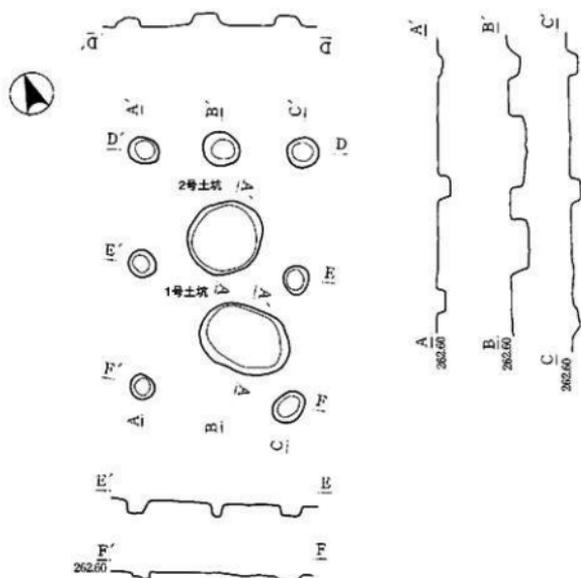
検出位置：X2-Y4グリッド、標高262.40m／平面プラン・規模：桁2間、梁2間、桁柱間2.1m、梁柱間1.2m、ピットは円形もしくは楕円形／断面：掘り込みの深さ20～30cm／覆土：黒褐色もしくは暗褐色
所見：1号掘立柱建物跡同様、掘り方が貧弱な遺構である。

3. 3号掘立柱建物跡

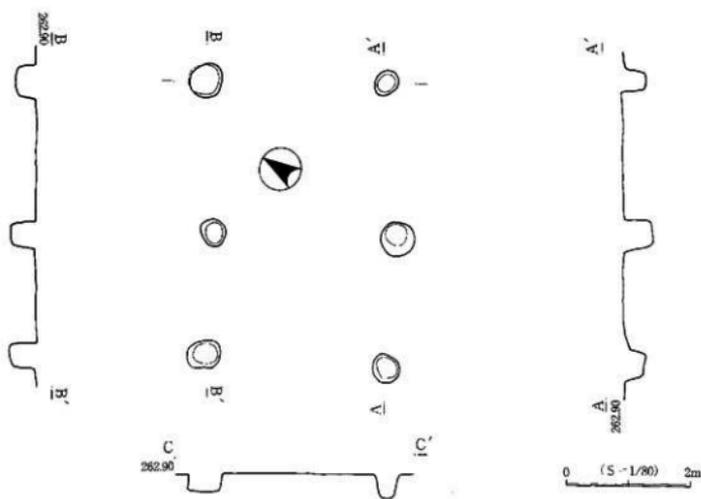
検出位置：X3-Y4グリッド、標高262.70m／平面プラン・規模：桁2間、梁1間、桁柱間2.4m、梁柱間3m、ピットは直径50～60cmのはほぼ円形／断面：掘り込みの深さ40～60cm／覆土：黒褐色もしくは暗褐色
所見：先述した2棟と同様、掘り方が貧弱な遺構である。



第13图 1号掘立柱建物跡遺構図



第14图 2号独立柱建物跡遺構図



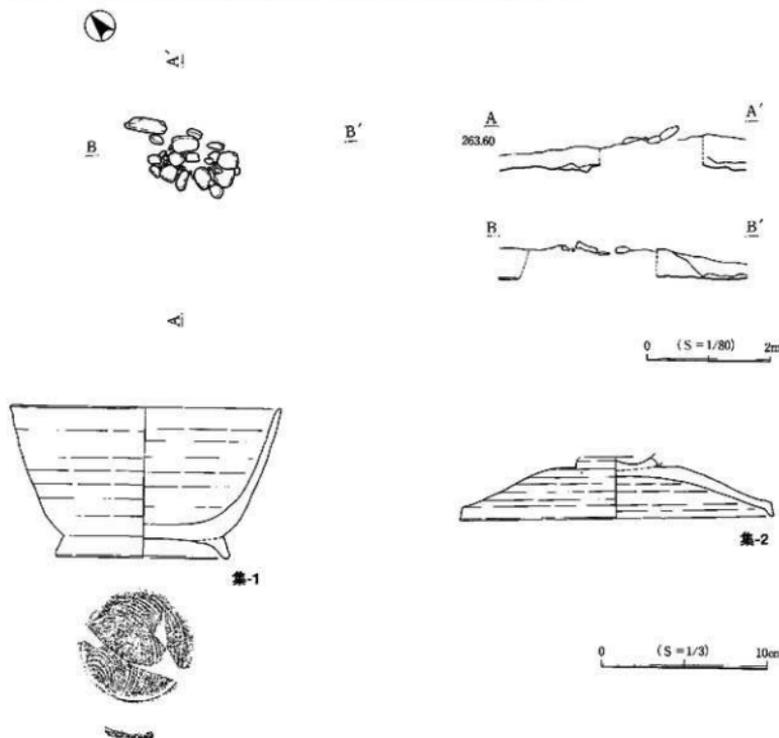
第15图 3号独立柱建物跡遺構図

4. 1号集石遺構

検出位置：X3-Y6グリッド、標高263.5m／平面プラン・規模：2m×1mの長方形の範囲で検出／構築状況：浅間B軽石の下、暗褐色土（標準堆積第IV層）直上に扁平な川原石を用いて構築してある。石の配列は乱されており、どのように並べられていたかは不明である。

出土遺物：須恵器の坏と蓋が出土している。いずれも胎土中に細砂粒・白色粒・黒色粒・煤の混入が認められ、右回転クランク調整である。

所見：遺存状況が良くないため、検出状況から推測するしかないが、おそらく30～40cmくらいの石を並べて敷き、外側は60～70cmくらいの石を立てていたと考えられる。遺構の性格は、祭祀的な意味合いをもつ可能性が高いといえよう。営まれた時期は、出土遺物から10世紀中葉と考えられる。



第16図 1号集石遺構・遺物図

5. 3号土坑

検出位置：X3-Y4グリッド、標高262.6m/平面プラン・規模：直径80cmの円形/断面：掘り込みの深さ20cm/覆土：黒褐色/出土遺物：土師器の甕1点

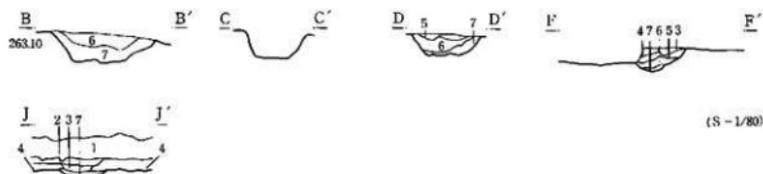
所見：出土遺物から10世紀と考えられる。



第17図 3号土坑遺構・遺物図

6. 1号溝

検出位置：調査区東寄り、X1-Y6グリッドからX6-Y1グリッド、標高263.0～262.3m/走行方向：南西から北東/検出した長さ：約67m/掘り込みの深さ：60cm/覆土：上層に浅間B軽石、下層に暗褐色もしくは黒褐色土/所見：検出された3条の溝状遺構の中で最も古い溝である。

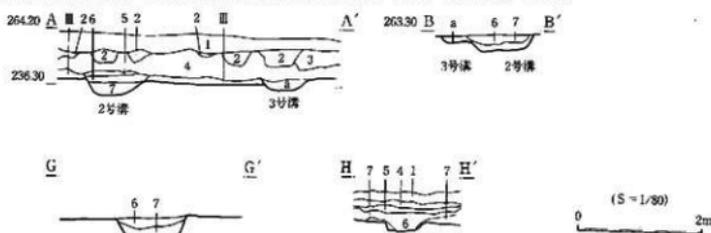


第18図 1号溝断面図

第3節 中・近世

1. 2号溝・3号溝

検出位置：調査区北側、X6-Y9グリッドからX5-Y1グリッド、標高263.4m～262.5m/走行方向：北西から南東/所見：浅間B軽石降下以後、同A軽石降下以前の溝状遺構である。



第19図 2号溝・3号溝断面図

第4節 時期不明遺構

1. 土坑

時期不明の土坑は12基で、いずれも出土遺物がなく、覆土中に軽石の堆積が見られない。したがって時期を確定するに至らなかった。検出された場所は調査区北東隅、1号溝の西側、2号溝の南側に集中する。

時期不明土坑一覧

2号土坑：位置=X 2-Y 4 / 標高=262.4m / 平面プラン=円 / 平面規模=直径120cm / 深さ=30cm

4号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=楕円 / 平面規模=50cm×30cm / 深さ=25cm

5号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=楕円 / 平面規模=50cm×38cm / 深さ=20cm

6号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=不整 / 平面規模=70cm×60cm / 深さ=40cm

7号土坑：位置=X 5-Y 1 / 標高=262.7m / 平面プラン=不整 / 平面規模=98cm×58cm / 深さ=20cm

8号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=不整 / 平面規模=90cm×80cm / 深さ=20cm

9号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=円 / 平面規模=直径50cm / 深さ=30cm

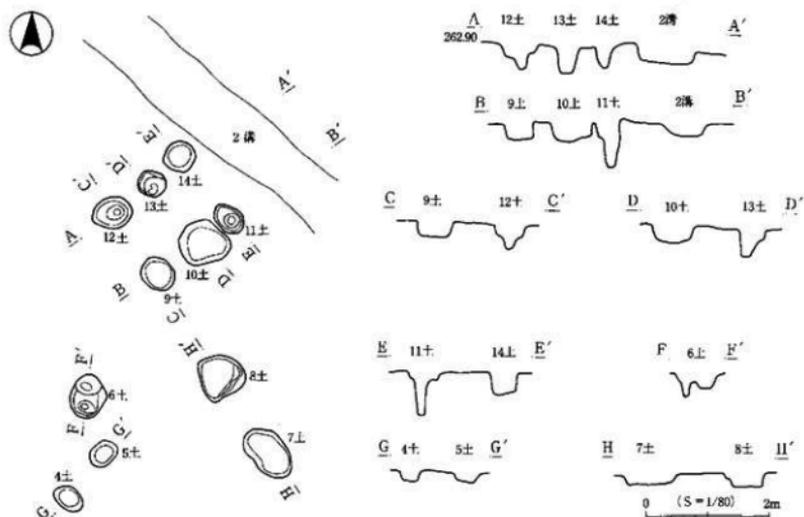
10号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=不整 / 平面規模=82cm×70cm / 深さ=40cm

11号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=卵 / 平面規模=59cm×41cm / 深さ=82cm

12号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=卵 / 平面規模=64cm×46cm / 深さ=41cm

13号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=不整 / 平面規模=42cm×41cm / 深さ=44cm

14号土坑：位置=X 5-Y 2 / 標高=262.7m / 平面プラン=円 / 平面規模=直径56cm / 深さ=38cm



第19図 時期不明土坑遺構図

表4 遺構外出土縄文時代遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	特徴 ①胎土、②胎成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成型形、⑦文様	備考
1	深鉢	器高 (12.7)	①砂粒・白色粒・輝石②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	加賀利 E 3 (資料系)
2	深鉢	器高 (7.4)	①砂粒・輝石・白色粒②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	加賀利 E 3 (資料系)
3	大型の深鉢	器高 (6.3)	①砂粒・白色粒・輝石②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	加賀利 E 1 (資料系)
4	大型の深鉢	器高 (8.2)	①砂粒・白色粒・輝石②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	加賀利 E 3 (資料系)
5	深鉢	器高 (6.6)	①砂粒・白色粒・輝石②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	加賀利 E 3
6	鉢	器高 (6.4)	①砂粒・白色粒・輝石②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	加賀利 E 3
番号	器種	法量	特徴 ①材質、②器形、③成型・調整、④使用痕、⑤その他	加賀利 E 3
7	打製石斧	長 (8.9cm)、幅5.5cm、厚2.3cm	①頁岩	
8	石鏃	長1.7cm、幅 (1.6cm)、厚0.5cm	①黒卵石②打製	
9	磨製石斧	長6.5cm、幅2.7cm、幅1.3cm	①緑肉輪部、硬質	
10	磨製石斧	長1.3cm、幅1.5cm、厚0.7cm	①緑色岩類、硬質	

表5 1号集石遺構出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	特徴 ①胎土、②胎成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成型形、⑦文様	備考
1	須恵器 環	口径 (16.4)、底径 (10.3)、 器高9.1	①緑砂粒・白色粒・輝・黒色炭化物②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	
2	須恵器 蓋	口径 (18.9)、器高 (3.7)	①緑砂粒・白色粒・輝・黒色炭化物②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	

表6 3号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	特徴 ①胎土、②胎成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成型形、⑦文様	備考
1	上須恵器 小型環	口径 (10.7)、器高 (3.2)	①緑砂粒・白色粒・褐色炭化物②青濁③に白い褐色④口縁部⑤口縁部⑥口縁部⑦口縁部⑧口縁部⑨口縁部⑩口縁部⑪口縁部⑫口縁部⑬口縁部⑭口縁部⑮口縁部⑯口縁部⑰口縁部⑱口縁部⑲口縁部⑳口縁部㉑口縁部㉒口縁部㉓口縁部㉔口縁部㉕口縁部㉖口縁部㉗口縁部㉘口縁部㉙口縁部㉚口縁部㉛口縁部㉜口縁部㉝口縁部㉞口縁部㉟口縁部㊱口縁部㊲口縁部㊳口縁部㊴口縁部㊵口縁部㊶口縁部㊷口縁部㊸口縁部㊹口縁部㊺口縁部㊻口縁部㊼口縁部㊽口縁部㊾口縁部㊿口縁部	

第5章 まとめ

1. 本遺跡と周辺遺跡の関係について（特に段丘面の違いによる集落規模の違い）

本遺跡における今回の発掘調査によって、松井田町周辺の礫水川下位河岸段丘面の縄文時代中期は、中位もしくは上位河岸段丘面に比較して、集落の規模がはるかに小さいか、もしくは単発的な住居が単発的に営まれるのではないかとこの一帯の仮定をもつに至った。

中位もしくは上位河岸段丘には規模の大きな遺跡が存在することはすでに周知されており、特に本遺跡と同じ時期である縄文時代中期後葉の加曾利E-曾利式期においては、最盛期を迎えるといってもいいような多くの遺構と遺物をもつ大集落-拠点集落的性格をもつ遺跡がいくつもある。しかしそれに対して下位河岸段丘においては、今までの発掘調査事例が少なかったこともあろうか集落と呼べる規模の遺跡がほとんど確認されておらず、その分布状況の違いは極めて明確になっている。

下位河岸段丘面に位置する本遺跡も、加曾利E 3式-曾利Ⅲ式期という極めて限定された時期に集落というよりも単発的な住居跡を含めた規模の小さなものであった。今後本遺跡も含めて下位段丘と中・上位段丘との遺跡の性格の違いについて、とくに拠点集落とその周辺という観点から検討する必要性を感じる。

2. 加曾利E 3式と曾利Ⅲ式の共存関係について（2号住居跡と5号住居跡の出土遺物から）

加曾利E 3式は本遺跡の主体をなす時期であることは前にも述べた通りであるが、その文様構成を見ると大きく分けて二つのパターンが認識された。それは口縁部文様帯において顕著に現れる。ひとつは口縁部文様帯の楕円区画もしくは横S字内に単発の縄文が充填されている場合で、2号住居跡の1、5号住居跡の6・9・12である。これらの土器は胴部においても、垂下する2条の沈線の間が磨消縄文である。したがって口縁部の区画内に縄文を用いるものと、胴部の垂下する沈線および磨消縄文は一体を構成する要素と考えることができる。この仮定によれば2号住居跡の2・3も範疇に入れてよいことになる。

それに対して他のひとつは、口縁部の楕円または船形の区画内に沈線を充填し、胴部には2条1組の降線を垂下させ、または蛇行する隆線もしくは沈線を垂下させるものである。前者に比べてより立体的な文様構成である。5号住居跡の出土遺物の主体はこのタイプで1・2・4・8が相当する。

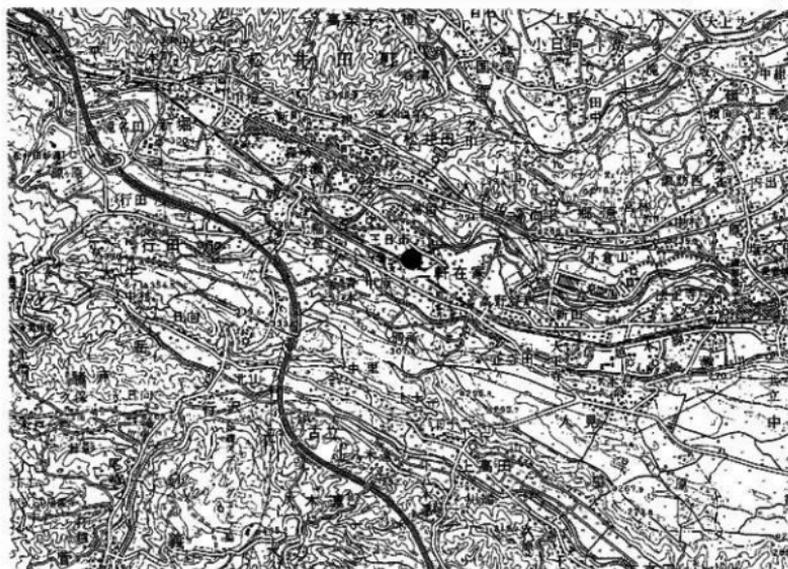
このような違いはどこに起因するのであろうか。それは前者のタイプを主とする2号住居跡と、後者のタイプを主とする5号住居跡の出土遺物を比較するとひとつの答えが見えてくる。2号住居跡は図示しなかった遺物も含めて胴部には全く隆線を垂下させておらず、いわゆる曾利Ⅲ式の遺物も全く見られなかった。これに対して5号住居跡は、3・5・7・10のような曾利Ⅲ式の遺物が共存しており、いずれも降線と沈線を多用した立体的装飾に富む文様をもつ。したがって後者のタイプは加曾利E 3式を主体として客体的に曾利Ⅲ式の要素が融合している可能性が考えられる。

3. おわりに

本遺跡は遺構・遺物の数が調査面積に対して少ない遺跡であった。しかしそこで提示された問題は、決して軽く見過すことのできないものである。今後も周辺で開発がなされることに伴い、大小さまざまな発掘調査が行われることになる。

抄 録

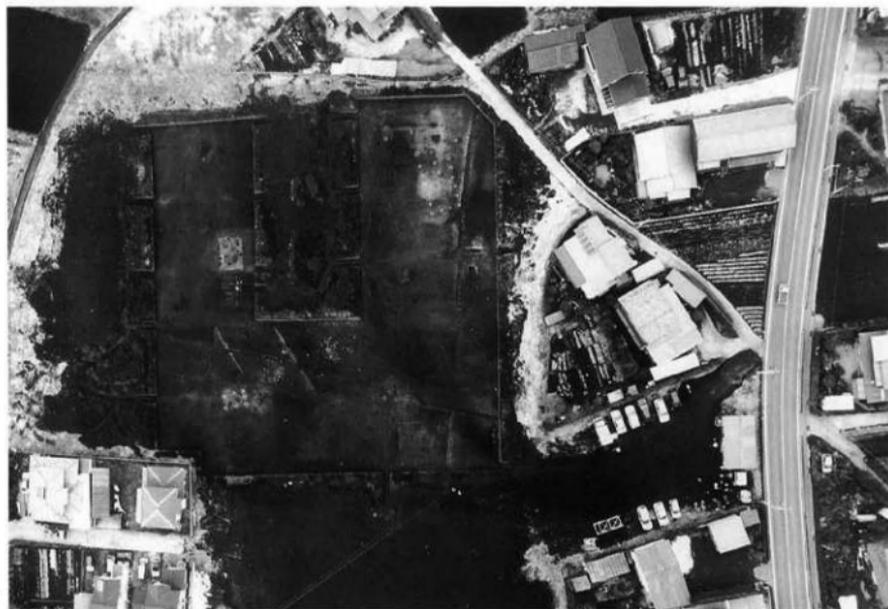
フリガナ	ニケンザイケトウコウジセキ							
書名	二軒在家東光寺遺跡							
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書							
シリーズ番号	(6)							
編著者名	小村 正之							
編集機関	山武考古学研究所/〒286 千葉県成田市並木町221番地 ☎0476 24-0536							
発行機関	松井田町埋蔵文化財調査会/〒373-02 群馬県碓井郡松井田町新堀245番地(教育委員会内) ☎0273-93-1111							
発行年月日	1997年3月21日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
二軒在家東光寺遺跡	群馬県碓井郡松井田町大字二軒在家字東光寺686-1他	10448		36°18'04"	138°48'48"	19960116 19960212	3,750㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
二軒在家東光寺遺跡	集落他	縄文 平安 時期不明	竪穴式住居跡 土坑 掘立柱建物跡 集石遺構 溝状遺構 土坑 土坑 溝状遺構	3軒 1基 3棟 1基 1条 1基 1条 2条	縄文土器：縄文中期後葉(加曾利E3式・曾利E式) 石器：打製石斧・磨製石斧・石鏃 土師器：小型壺 須恵器：坏・甕			



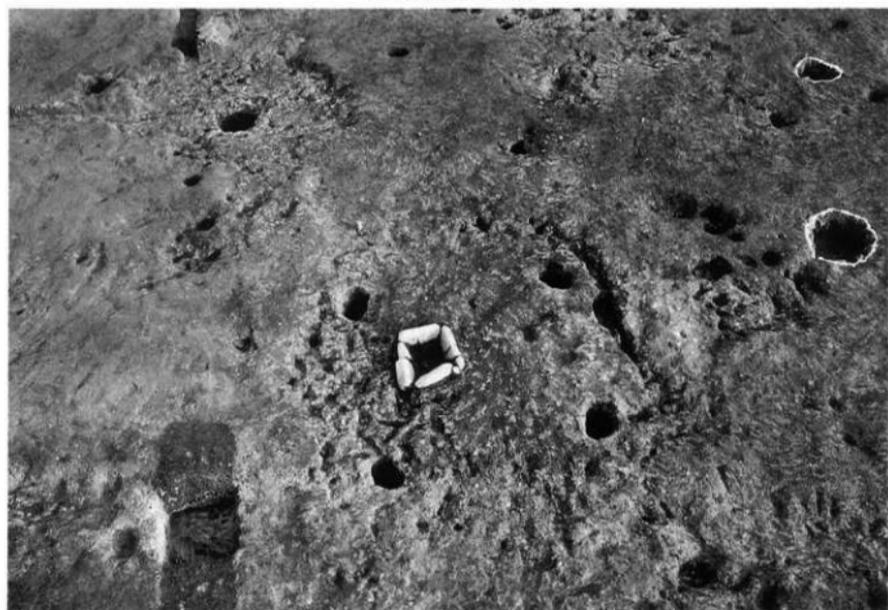
抄録図 二軒在家東光寺遺跡位置図 (S=1/50,000)



1. 遺跡周辺全景（空撮）



1. 調査区全景 (空撮)



2. 1号住居跡完掘全景



1. 2号住居跡完掘全景



2. 5号住居跡完掘全景

図版 4



1. 5号住居跡遺物出土状況全景



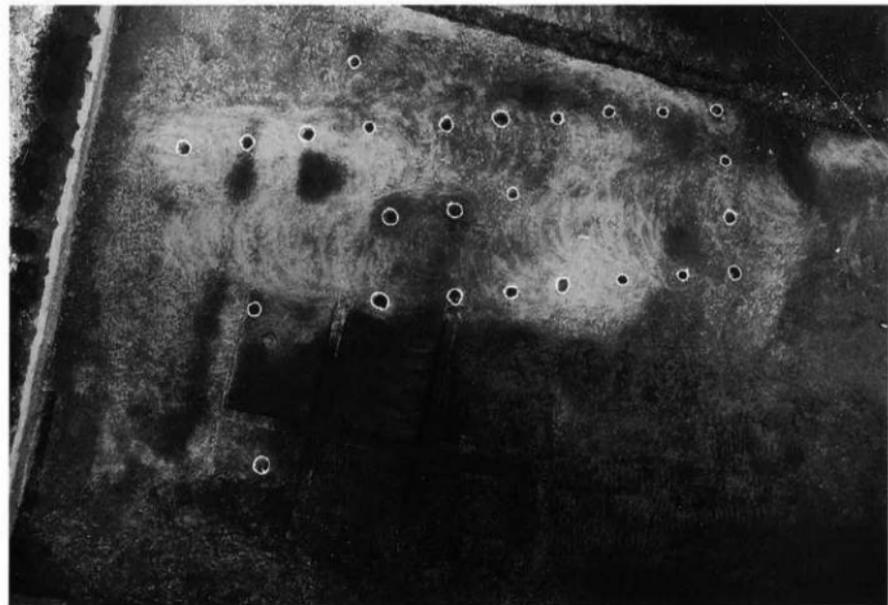
2. 5号住居跡遺物出土状況



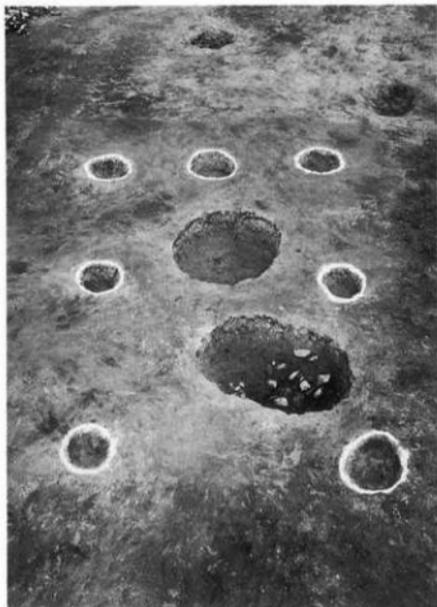
3. 5号住居跡遺物出土状況



4. 5号住居跡遺物出土状況



5. 1号掘立柱建物跡完掘全景 (空撮)



1. 2号掘立柱建物跡完掘全景



2. 3号掘立柱建物跡完掘全景



3. 1号集石遺構全景

図版 6



2住-1



2住-2



5住-4



5住-1



5住-2



5住-6



5住-8



5住-3



5住-10①



5住-10②



5住-10③



5住-5



5住-9

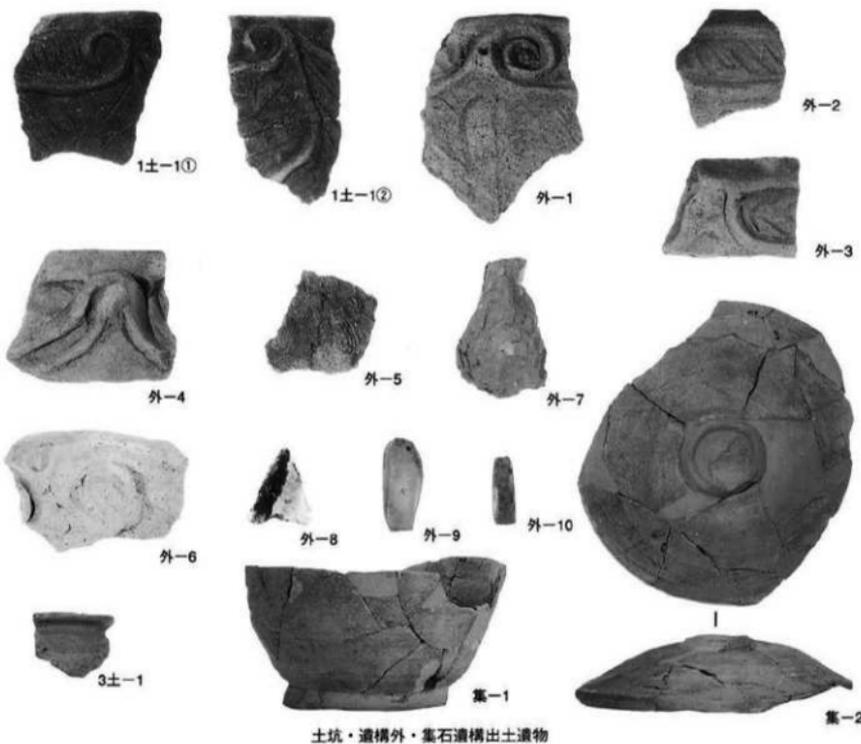


5住-11



5住-13

図版 8



松井町埋蔵文化財調査会報告書〈6〉

二軒在家東光寺遺跡

印刷 平成9年3月20日

発行 平成9年3月21日

編集 山武考古学研究所

発行 松井町埋蔵文化財調査会

印刷 源文化総合企画